

1 親不孝者空海

親不孝者空海

空海は親不孝だった。

そう言うと驚く人も多いかもしれない。その成長過程を見てみよう。

空海は確かに、持って生まれた才能の面から見ると、その生誕からして聖人降誕を思わせる逸話が残され、長じての才気煥発ぶりもよく知られる、才長けた人ではあったが・・・。

しかし、その行動の面から見ると、親の期待はどこ吹く風と自分の思うように勝手気ままにその進む道を決めていっており、情緒面、特に家族間の情愛はどうであったのだろうかと思えて来る。

父母ともにそれなりの格式ある家の出である。真魚という幼名の頃は周りから神童と呼ばれており、家族、一族を背負う者として、親としてもその将来に少なからず期待もしていたであろう。

大学に進み、それを終えれば、官吏の道もそれなりに開け、波風立てず、一生を終える事も出来たであろうが、空海はそれを良しとしなかった。

自分の行く道を勝手に決め、大学を中退して当てない暮らしを始めたり、危険伴う遣唐使で渡唐したり、国の決まり事を破ったりと、親に心配をかけ続けた空海はまた、幼少期だけでなく、成人してからも親の脛をかじり続けている。

ところが、親からの情愛を受け続ける反面、空海からの孝行、例えば15才で親元を離れてから親に会いにいった形跡が見当たらないのである。これは、唐から日本に帰って来てからは、四国讃岐の親元に帰る暇は無いほど多忙を極めていた為かもしれないが、親に書送ったと言う手紙の一通すら残っていないの

だ。

当時の律令国家日本で、官僚をはじめとしてその行動規範として必須であった儒教とは‘孝’を強調した教えである。孝心が見られぬ空海の新しい教えが、どうして国家でも受容されて行ったのだろうか。

空海が唐で学び、授かって日本に持ち帰ったものは、密教とそれに関わる仏画、仏具などや、五明と言う実学に関する物など色々あるが、その中には“四恩”という思想もあった。これの第一に挙げられているのが“父母の恩”。

日本に帰ってからも仏さまに拜む時の願文などにも、たびたび四恩に報いんが為であることを強調しており、それは真言密教にとってひとつの大きな柱ともいえるものだ。それにも関わらず、自身の親に対して孝行している様子が見られず、むしろ逆に心配ばかり懸けている。

空海とは、実は口先だけの詐術師であったのか。